スポーツクラブ人国記（6）

医学部サッカー部

平成27年9月からＮＨＫで放送されている朝の連続ドラマ「あさが来た」に登場する五代友厚らの尽力で明治13年設立された「大阪商業講習所」を源流とする大阪市立大学の歴史の中で、医学部はいわゆる新参者の学部である。その前身は第二次世界大戦中の昭和19年に設立された大阪市立医学専門学校で、今でいう医学部キャンパスは扇町商業学校の一部を借り入れ、附属病院は現在と同じ地であるが、当時は大阪市立南市民病院であったと聞き及んでいる。その後大阪市立医専大学、大阪市立医科大学を経て、昭和30年大阪市立大学に編入された。したがって、大阪市立大学医学部としての歴史は約60年ということになる。

医学部サッカー部の始まりは未だ定かではない。サッカー好きの学生が、学舎の運動場や附属病院内の空き地でボールを蹴りに集まることがあったというが、正式な発足は、医科大学昇格となる昭和23年とされている。その年、近畿医科大学対抗試合（インターＭ）のサッカー競技に柳本行雄（昭和28年卒、解剖学、元四天王寺大学学長）を主将として初参加することになり、これが医学部サッカー部創部の基因となった。

サッカー以外の種目も多く、学生数の少なかった当時は、一人の学生がいろんな競技に参加するというのどかなものであり、当然サッカー部も他のクラブの学生に助人として加わってもらう混成チームであった。その後学生の数が増えたことにより、サッカー部員単独でチームを作れるようになった時期と同じくして、前述したように昭和30年医学部が大阪市立大学に編入されると、練習も本学杉本のグラウンドで行うようになった。しかも、体育会のご厚意で、週三回医学部サッカー部が定期的に練習できるようグランド使用の認可をいただき、また、昭和41年水泳プールが完成した際、その施設内にクラブ部室を構えることになった。

現在まで３００名弱の学生が医学部サッカー部に所属してきたが、部長には歴代医学部教授がその任にあたっている。初代部長は島五郎先生（京城大学、解剖学）、二代目が行岡宗彦先生（昭和34年卒、生化学）である。三代目からは医学部サッカー部出身の教授が務めるようになり、一色玄（昭和33年卒、小児科）、木下博明（昭和38年卒、第二外科）、岩尾洋（昭和49年卒、薬理学）と継承され、現在の部長は白木邦彦（昭和53年卒、視覚病態学）である。その他サッカー部からは数多くの教授を輩出し、岸本武利（昭和37年卒、泌尿器科）、大杉治司（昭和50年卒、消化器外科学）、山根英雄（昭和52年卒、耳鼻咽喉病態学）、井上幸紀（昭和62年卒、神経精神医学）、池田一雄（平成元年卒、機能細胞形態学）、角俊幸（平成3年卒、女性病態医学）らも、部長を支える副部長としてサッカー部員の指導を行ってきた。また、佐藤守男（昭和51年卒、和歌山県立医大放射線科）や松永寿人（昭和63年卒、兵庫医大精神科）は、他大学で教授として臨床、研究の指導にあたっている。

医学部サッカー部は、本学サッカー部のように日本学生サッカー連盟が主催する関西学生リーグ戦や総理大臣杯には参加していない。主な大会は、夏に開催される西日本医科学生体育大会（通称西医体）、春秋行われる関西医歯薬大会である。西医体ではこれまで優勝一回、準優勝三回、三位二回の戦績を修めている。一橋大学や府立大学には医学部がないため、三商大戦や府立大学との対抗戦には参加できないが、岐阜大学医学部、和歌山県立医科大学医学部との三大学戦など、他大学医学部サッカー部と定期交流戦を行っている。また、近年では関西の十の大学医学部サッカー部が参加する春のリーグ戦が開催されるようになり、毎年上位の成績を残している。

昭和37年台湾訪問での親善試合

当部の特色は、海外の大学を訪問し、その地の医学部学生と親善試合を積極的に行っていることである。初回は昭和37年台湾（中国医薬学院、高雄医学院、台湾大学と対戦）であり、続いて昭和41年には初代部長の島先生が京城

大学出身であったことから、大韓民国を訪問している（ソウル大学、延世大学、慶北大学、釜山大学と対戦）。期間が少し空くが、昭和53年にスリランカ（セイロン大学、セイロン大学ペラデニアキャンバス）、平成22年再び台湾（台北医学院、台湾大学）で親善試合を行った。また、平成元年からは、市立大学医学部としても友好関係にある大韓民国慶熙大学医学部と3年毎にお互いの大学を訪問し合い、交流戦を継続している。サッカーの試合に加えて、ＯＢは学術交流、学生はホームステイで友好を深めている。両大学のサッカーを通じての親密な関係がきっかけとなり、平成27年から慶熙大学医学部の学生数名が市立大学医学部付属病院で臨床実習を行うようになった。卒業後医師となって、研究生活を海外に求めて留学する医学部サッカー部員が数多いのは、これらの経験を通して、学生時代から国際的な感覚を身につけているのがその要因と自負している。

平成26年大韓民国慶熙大学医学部を
大阪に迎えての親善試合

一方、当部のＯＢ会であるが、創部間もない頃から、卒業後医師となった柳本行雄を初めとするＯＢが率先して現役学生の支援を行っていたものの、金銭的援助が主な活動であった。正式なＯＢ会が発足したのは昭和43年で、初代会長に黒田実（昭和29年卒、整形外科）が就任した。その後昭和52年に会則を定め、名簿の作成を行うとともに、年一回のＯＢ総会が開催されるようになった。通常のＯＢ会の活動は、会員同士の親睦と学生支援である。しかし、医学部サッカー部の場合は、学生時代にサッカー部員としてボールを蹴った経験の持ち主で、かつ卒業後医師となった者が会員であり、親睦、現役クラブ活動援助のみならず、学業継続が困難な学生への経済的援助、学生への精神的援助（先輩医師としての相談相手）などを通して、学生が将来立派な医師になることを支援することにより社会に奉仕することがその活動理念である。さらに、先述したように留学を希望する若手医師が多く、その費用援助も行っている。総会、新入生歓迎会、卒業生を送る会などで酒を酌み交わすだけでなく、年を通じて医学情報の交換、専門分野の会員へ自分が今診ている患者さんの治療に関する相談や紹介などのネットワークを作っていることが当会の親睦である。このような活動理念を提唱したのは、関淳一（昭和36年卒、第二内科、元大阪市長、現日本ＷＨＯ協会理事長）と金子実（昭和35年卒、耳鼻咽喉科）らであり、その後の歴代ＯＢ会長、岡島幹雄（昭和34年卒、整形外科）、結城清之（昭和38年卒、泌尿器科）、北野公造（昭和43年卒、整形外科、現済生会中津医療福祉センター総長）、杉本俊門（昭和54年卒、泌尿器科）に受け継がれ、現在２５０名の会員が参加している。また、ＯＢ会の名称は単純に大阪市立大学医学部サッカー部ＯＢ会であったが、岡島幹雄が会長を務めていた時期に大阪市立大学スポーツアソシエイションに加盟するにあたり、蹴澪会と称するようになった。

本稿では、医学部サッカー部の創部以来の経過、現役学生とＯＢ会の現在の活動状況の紹介が主となり、「スポーツクラブ人国記」の主題とは少し離れた内容となった。稿を終えるにあたり、大阪市立大学医学部の卒業名簿には、卒業年度、専門分野、勤務先などしか記載されていないが、その中には、かつて医学部サッカー部に所属してボールを蹴り、卒業後、地域医療の場、中核病院、研究機関や教育機関で活躍している部員が数多くいることを銘記しておきたい。

（杉本　俊門・記）